

令和4年3月31日

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所	島根県松江市殿町1番地
管理機関名	島根県教育委員会
代表者名	教育長 野津建二

令和3年度地域との協働による高等学校教育改革推進事業に係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

令和3年4月1日（契約締結日）～ 令和4年3月31日

2 指定校名・類型

学校名	島根県立矢上高等学校
学校長名	志波英樹
類型	地域魅力化型

3 研究開発名

おおなん協育プロジェクト ～邑南町総がかり！協働で育む“協育”カリキュラムの開発～

4 研究開発概要

本校普通科において、地域人材を育成するためには、地域に飛び込み、地域住民と関わる中で課題を見つけ、多様な人々と協働し、教科や地域の歴史や文化といった様々な知恵を結集させ、課題解決を実践するカリキュラムを作ることが重要である。令和2年度は、コロナ禍で当初予定の地域協働活動が行えなかったが、カリキュラム・教材開発や体制の整備を図り、実施の準備が整った。さらに、本事業コンソーシアムを包含する「矢上高校と地域の未来をつくる会（コンソーシアム）」を設立したところである。令和3年度は、開発した教材や整備した体制、またウィズコロナ時代を見据えて、Ⅰ「普通科総合的な探究の時間の改善」Ⅱ「教科横断カリキュラムの拡大」Ⅲ「学校設定教科『起業探究』の実施」を行い、邑南町総がかりで地域人材の育成を継続する仕組みの“検証期間”とする。具体的には、令和2年度の振り返りに基づき、掲げたⅠ・Ⅱ・Ⅲをコンソーシアムの協働活動として運営できるよう、体制強化を図っていく。

- Ⅰ「普通科総合的な探究の時間の改善」…授業時間の選択と集約、協育パートナーとの連携を強化する。
- Ⅱ「教科横断カリキュラムの拡大」…東京五輪開催に伴い「オリンピック・パラリンピック」をテーマに批判的思考力を養い、実践力を養うため、「感染症」「主権者教育」をテーマに教科横断した教材を開発・実施する。

Ⅲ「学校設定教科『起業探究』の実施」…令和2年度に制作した教材に基づき授業実践（今年度は2年生のみが対象となる）、「総合的な探究の時間」との連携，協育パートナーによる伴走，ビジネスプランコンテストへの出場等を図りたい。

5 学校設定教科・科目の開設，教育課程の特例の活用の有無

- ・学校設定教科・科目 開設している
- ・教育課程の特例の活用 活用していない

6 運営指導委員会の体制

氏名	所属・職	備考
日高輝和	邑南町 副町長	
馬庭寿美代	島根県教育委員会 企画幹	
白石絢也	一般社団法人小さな拠点ネットワーク研究所	
清國祐二	独立行政法人教職員支援機構つくば中央研修センター長	

7 高等学校と地域との協働によるコンソーシアムの体制

機関名	機関の代表者
邑南町	町長 石橋良治
島根県議会	議員 福井竜夫
浜田市役所	旭支所長 西川修二
邑南町議会	議長 石橋純二
島根県立矢上高等学校	校長 志波英樹
矢上高校卒業生会	会長 神田恵介
島根大学教育学部	教授 作野広和
島根県立大学総合政策学部	教授 赤坂一念
矢上高校 PTA	会長 森口英司
矢上高校地域応援団	委員長 小泉篤
邑南町教育委員会	教育長 土居達也
邑南町立羽須美中学校	校長 竹下和宏
邑南町立瑞穂中学校	校長 永岡靖
邑南町立石見中学校	校長 樽田真治
島根県立石見養護学校	校長 中村厚子
邑南町商工会	副会長 小泉賢咲
邑南町進出企業会	会長 大田喜穂
JA しまね島根おおち地区本部	本部長 日高光弘
公立邑智病院	事務部長 日高武英
医療法人徳祐会	理事長 三上巖信
島根県教育委員会教育指導課	企画幹 馬庭寿美代

8 カリキュラム開発専門家，海外交流アドバイザー，地域協働学習支援員

分類	氏名	所属・職	雇用形態
カリキュラム開発専門家	作野広和	島根大学教育学部教授	非常勤
地域協働学習支援員	小林圭介	一般社団法人地域商社ビレッジプライド邑南	常勤

9 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

実施項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
運営指導委員会				1回								1回
コンソーシアム運営支援	教育庁各課横断の伴走											
探究学習推進	研修① 担当者設定		ミニ研修①			ミニ研修②				ミニ研修③	発表会 研修②③	
	探究指導主事の伴走											
コーディネーター研修		研修①	研修②③		研修④			研修⑤⑥		研修⑦		
高校魅力化評価システムによる調査・検証	研修①		調査	フィードバック	活用研修④		共有 活用事例					
	各校の検証、県担当者の伴走											
人員配置										予算要求		配置決定

(2) 実績の説明

①運営指導委員会の開催・授業や発表会への参加等

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
運営指導委員会の実施			1回						1回			1回
コンソーシアム役員会への参加			1回				1回				1回	
授業への参加・参観								1回				

成果発表会への参加・助言										アーカイブ参観			1回
事業の広報										1回			

②体制支援・活動支援

コンソーシアム構築・運営支援	4箇所の先導モデルの知見を他のコンソーシアムの設置や運営に活用。効果的な構築・運営のための年間を通じた伴走を実施。コンソーシアムの運営費、運営マネージャー配置費を支援（県1/2）
探究学習推進	令和2年度から教育庁に探究学習専任指導主事を配置。あわせて探究学習を推進する教員を各校1名設定し研修を実施（必修3回、希望者3回、助言支援随時）。探究学習（地域課題解決型学習）実施に係る経費を支援し、高校生・教員が探究学習の成果を発表する場（「しまね大交流会」、「しまね探究フェスタ」）を設定（今年度はオンラインでの実施）。その他、年間を通じて探究学習の推進に係る助言等を実施。
魅力化コーディネーター研修	市町村等で配置されている魅力化コーディネーターの研修や、教職員のコーディネーター機能の研修を実施。
高校魅力化評価システムの構築と活用研修	「社会に開かれた教育課程」の要素を定量的に把握するため、生徒と地域へのアンケートを実施。結果を基に校内研修を実施している学校の事例発表を含めた、グランドデザイン実現に向けたPDCA構築のための教職員研修を実施。
人員配置	新しい高校づくりに向かう体制構築として、県単追加配の主幹教諭をR3年度は15名配置、R4年度は3名増員。さらに、R3年度は高大連携を推進する職員を3名配置。

③事業終了後の自走を見据えた取組について

- ・「教育魅力化人づくり推進事業」の継続や教育庁の教育魅力化推進チームの伴走体制の強化による学校・コンソーシアムへの支援の継続
- ・学校と地域が協働して取り組むPBL型研修の実施による、各コンソーシアムの主体的取組への推進支援
- ・令和3年度末にすべての高校でコンソーシアムが構築。令和4年度からは学校運営協議会制度を導入し、一体的に運用することで、法的権限を持った組織として機能強化
- ・すべての教職員が活用できるようICT環境の整備と研修を実施
- ・探究学習推進担当者を中心とした探究的な学びについての質の向上研修の継続
- ・クラウドファンディングやふるさと納税等を活用した教育活動資金獲得について、研究を継続、知見を共有
- ・探究学習や教育課程開発を推進する教職員や教育魅力化コーディネーターの配置、養成・確保・育成
- ・各校が作成したグランドデザイン実現に向けた取組のさらなる推進。「高校魅力化評価システム」等を活用したPDCAサイクルの構築と活用研修の実施

10 研究開発の実績

(1) 実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
I：普通科総合的な探究の時間の改善	3回	5回	5回	5回	1回	2回	2回	5回	8回	3回	2回	1回

Ⅱ：教科横断カリキュラムの拡大		1回	1回							2回		
Ⅲ：学校設定教科『起業探究』の実施	4回	6回	8回	5回	2回	5回	7回	6回	5回	3回	4回	3回

*総合的な探究の時間のカウンタは、1学年、2学年の合算である。

(2) 実績の説明

[1] 研究開発の内容や地域課題研究の内容について

<インタビュー雑誌作成（1年生）>

新型コロナウイルス感染症の拡大蔓延を警戒するとともに、限られた時間の中で充実した内容を図るため、町内でのインターンシップを自粛した。その代わりに、地域の人たちの生き方を探り、地域の魅力発信を行うというテーマで、短時間ながらインタビューを実施し、その内容を雑誌にまとめる活動をしている。分野や人選は、生徒の希望職種と邑南町役場地域みらい課の推挙によって選定した。17団体（18人）にご協力いただいた。

<地域課題研究（2年生）>

今期は、邑南町地域みらい課が実施している「地区別戦略事業」と関わり、対応可能な地区（地域団体）と協働活動を実施。また、地域団体に限らず、民間企業・団体とも協働活動を実施。

	地域・団体	概要
1	井原地区	井原地区のPRをするため、井原地区のSNSアカウント作成、SNS周知のための名刺作成、お年寄り向けのSNS講習を実施。
2	邑南町商工会青年部	同級生でも邑南町全域について知っている訳ではないことに気づき、町内の観光スポットや飲食店等を調査、オープンスクールにて模造紙展示を行った。
3	島根県住みます芸人	コロナ禍で笑顔が少なくなっていることをなんとかしたいと思い、11月7日、邑南町内で初のお笑いライブと神楽公演のイベントを計画、実施。
4	地域団体たかはらんど	高原のお米の美味しさをたくさんの人に味わって欲しいと思い、高原のお米を使った商品を開発、販売。11月23日のお祭りでは司会なども実施。
5	香木の森公園再生プロジェクト	香木の森公園への観光客を増やすため、自分達で音楽ライブとイルミネーションイベントを企画実施。
6	邑南町社会福祉協議会	地域の高齢の方に元気になってほしいと考え、地域の方と料理を作り、食べ、売ることを企画。販売には至っていないが、商品試作を行なった。
7	日貫地区	日貫半紙技術の復活のため、自分達で再生紙を使った紙漉きを実施。12月4日、5日には外部団体とコラボしたイベントを行なった。
8	矢上地区	矢上地区での交流機会を増やすため、10月9日に中学生向けに勉強を教える会を実施。12月12日には家族向けにデイキャンプを実施。
9	有限会社ディプロ	邑南町のフードロスを減らすために、町内の商店、小中学校にアンケート実施。また、高校の寮で朝食の残食を減らすために企画実施。
10	石見養護学校	町民の災害に対する意識が低いことを課題に家族全員で楽しめる防災ボードゲームを考案。
11	出羽自治会	空き家を有効活用して出羽を盛り上げるため、11月14日に空き家や使われていない場所を使ったイベントを開催しました。
12	市木市プロジェクト	市木に人が立ち寄るようにするため、市木の特産品を使った商品を試作、市木市についてのパンフレットを作る計画を立案。

<起業探究（2年生）>

今期は、1学期「価値・価格設定、課題解決＝ビジネス、6次産業（半農半X）、サツマイモ植え付け」、2学期「ビジネスプランコンテスト、商品加工」、3学期「デザイン思考、商品アイデア、プレゼン」を実施。また、学期に一回は企業人による出張授業を依頼しており、1学期は「株式会社ぐるなび」、2学期は「島根県住みます芸人」、3学期は「一般社団法人小さな拠点ネットワーク研究所」による出張授業を計画・実施した。

[2] 地域との協働による探究的な学びを実現する学習内容の教育課程内における位置付け

地域との協働による探究的な学びを実現する学習内容は、次の教科・科目が主に扱っている。

・総合的な探究の時間

総合的な探究の時間では、「批判的思考力」「自己肯定感」「表現力」の資質能力の向上をねらいとし、地域との協働による探究的な学びのための学習内容を扱っている。特に2年生は「[1] 研究開発の内容や地域課題研究の内容について」にもあるように、協育パートナーに関わってもらい、地域課題解決を図っている。

・学校設定教科「起業探究」

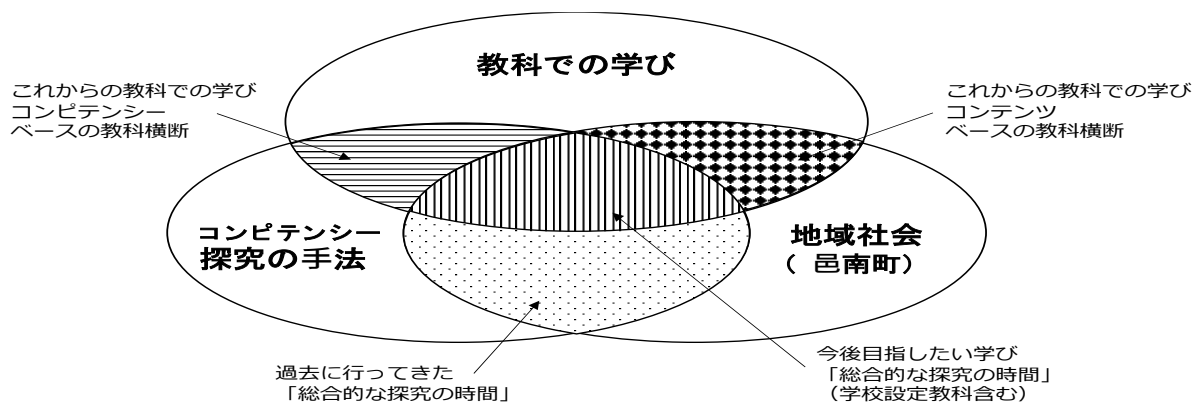
今年度から始まった「起業探究」では、起業1学期「価値・価格設定、課題解決＝ビジネス、6次産業（半農半X）、サツマイモ植え付け」、2学期「地域課題解決のためのビジネスプランコンテスト、商品加工」、3学期「地域課題解決のためのデザイン思考、商品アイデア、プレゼン」を実施した。また、学期に一回は企業人による出張授業を企画し、1学期は「株式会社ぐるなび」、2学期は「島根県住みます芸人」、3学期は「一般社団法人小さな拠点ネットワーク研究所」による出張授業を実施した。

・各教科での位置付け：家庭科／公民科

島根県立大学の先生や大学生と関わりながら、家庭科・公民科で「ゼロカーボンシティ＝2050年の暮らし」を想像し、そのために何ができるのかについて考える時間を作った。翌年度の総合的な探究の時間では、ゼロカーボンシティや再生可能エネルギーをテーマに探究活動を行うチームを編成する予定である。

[3] 地域との協働による探究的な学びを取り入れた各科目等における学習を相互に関連させ、教科等横断的な学習とする取組について

今年度は1年生で行う教科横断的な内容を「学際科目」と名づけ、教科同士の関連性や教科の探究に活用できる内容として、教材作成を行なった。その際、下記のように内容を整理・検討した。



教科	英語*福祉（家庭科）
テーマ	文化的衝突（宗教食）
内容	英語の教科書では、他国の学校と日本の学校の違いに関する長文読解を行っている。また、島根県では出雲市にブラジルから多くの労働者が移住し、日本語が満足に話せない子供たちの対応が課題になっている。矢上高校や邑南町内ではまだ大きな問題にはなっていないが、新型コロナウイルス感染症が収束すると、多くの海外からの移住者が増え、文化的衝突が発生すると考えられる。そこで、既に都会で発生しているトラブルを事例にワークを行い、どのように考えるべきかを議論した。

教科	体育*福祉（家庭科）
テーマ	パラリンピックレガシー（公平）
内容	未習ではあるが、オリンピック・パラリンピックについては、体育の単元で学習する。また、オリンピック・パラリンピック開催を直前に控え、予習として本授業を実施した。オリンピック・パラリンピックムーブメントを確認し、パラリンピックの意義や使命を理解してもらった。パラリンピックの「公平」をテーマとして、足が不自由な方も楽しめるバレーのルールを考えるワークを行なった。また、シッティングバレーの動画（I'm possible より）を視聴した。

教科	保健*家庭*公民*理科（生物基礎）
テーマ	タンパク質危機
内容	1年生の保健体育では、「食事と健康」の単元があり、家庭科の「調理実習」（コロナ禍のため実施できず）、生物基礎の「タンパク質」の単元を実施することが決まっていた。2050年に起きるであろう「タンパク質危機（食糧危機）」をテーマに、公民の「市場（需要供給曲線）」の内容を合わせ、未来の食糧問題解決のため、今自分たちが何をすべきかについて考える機会となった。
備考	昨年度作成教材、今年度の保健体育でも実施した。
教科	家庭*公民
テーマ	労働と福祉
内容	1年生の総合的な探究の時間では、2学期期間で「進路」に関する内容を扱っている。これまでの進路学習は、地域の大人たちによるキャリア講和がメインであったが、「労働の光と影」をテーマに、自身の生き方と、労働問題や社会保障との連携を図ることにした。どの生徒も既知であるイソップ童話「アリとキリギリス」を演じ、邑南町社会福祉協議会から現代の労働問題や社会保障の問題を説明してもらい、地域として、また自分たちがどのような課題解決ができるのかを考えてもらった。

備考	昨年度作成教材。今年度総合的な探究の時間で実施予定だが、休校により実施できず。
----	---

教科	家庭*公民
テーマ	カーボンニュートラル
内容	ゼロカーボンシティ宣言を邑南町が宣言したことを受け、「持続可能な社会」という単元や「住まい」の単元がある家庭科や公民科で扱った。ゼロカーボンシティの意義を大学の先生から説明してもらい、これからの住まいはどうなるのか、そのために何をすべきかを考えるワークを行なった。
備考	オンラインでの実施となった

[4] 地域との協働による探究的な学びを実現するためのカリキュラム・マネジメントの推進体制

カリキュラム開発等専門家は、学識経験者として、魅力化センターで立案したカリキュラム案や計画について助言し、オンライン等で進捗管理、年度末にはカリキュラムの検証を行う。また、教員対象の研修会、研究授業後の研究会の開催やシンポジウムの講演などを通じ、本事業の意義を校内や地域へ普及させる。地域協働学習実施支援員は魅力化センターの一員に位置付けられ、総合的な探究の時間や教科横断カリキュラム、学校設定教科における外部との調整や教材作成、地域人材の発掘を行う。

[5] 学校全体の研究開発体制について（教師の役割、それを支援する体制について）

主幹教諭、邑南町役場職員、コーディネーターで構成される「矢上高校魅力化推進センター」が本研究体制の中心である。矢上高校魅力化推進センターは、主幹教諭・探究学習担当・コーディネーター・役場担当で構成される。探究学習担当とコーディネーターが教材開発を行い、推進センター内で共有され、実行される。

[6] カリキュラム開発専門家、地域協働学習実施支援員の学校内における位置付けについて

カリキュラム開発専門家は、邑南町の顧問でもあり、地域の状況に精通している。地域と協働した授業実施の際は、フィールドワークやワークに入っただき、生徒の現状や今後の進め方などをご助言いただいている。

地域協働学習実施支援員は魅力化推進センターに常勤し、主幹教諭と協働し教材作成や地域との接続などに携わっている。

[7] 学校長の下で、研究開発の進捗管理を行い、定期的な確認や成果の検証・評価等を通じ、計画・方法を改善していく仕組みについて

魅力化推進センターにて教材を制作し、学年会を通じて教材の内容確認を行う。また、随時教員へのヒアリング、学年末の評価アンケート等を通じ、内容改善を図る。

[8]カリキュラム開発に対するコンソーシアムにおける取組について

昨年度末に「矢上高校と地域の未来をつくる会（コンソーシアム）」を立ち上げ、部会として本事業を担当し、実行している。

[9]運営指導員会等、取組に対する指導助言等に関する専門家からの支援について

年 3 回の運営指導員会、定期的なカリキュラム開発専門家との打ち合わせによって地域との関わりや校内体制などへの指摘を受けた。後述する課題部分にて記載する。

[10]類型毎の趣旨に応じた取組について

特になし

[11]成果の普及方法・実績について

12 月に成果発表会（課題解決型学習発表会）、3 月に学科混同の成果発表会（未来フォーラム）を開催する。

さらに、本校ホームページでも取組を発信。（<https://www.yakami.ed.jp/purpose04/ohnankyouiku/>）

1 1 目標の進捗状況，成果，評価

1. 本構想において実現する成果目標の設定：魅力化評価システム：12月時点での集計

	内容	目標値	結果
a	「地域の課題の解決方法について考える」と答える生徒の割合	55%	81%*1
b	「将来、自分のいま住んでいる地域で働きたいと思う」と答える生徒の割合	45%	47.2%*1
c	「地域社会などでボランティア活動に参加した」と答える生徒の割合	40%	50%*2

*1) 普通科 2 年生を対象に実施。

*2) 普通科 2 年生を対象に実施。探究活動が土日に多く、それらをボランティアと考えた生徒が返答した可能性が高い。

2. 地域人材を育成する高校としての活動指標：3月時点での集計

	内容	目標値	結果
a	研究授業等の回数	6 回	1 回
b	普及・促進のためのワークショップやシンポジウムの開催回数	2 回	2 回
c	協育プログラム教材の制作及びその公開単元数	4 本	5 本

3. 地域人材を育成する地域としての活動指標：3月時点の集計

	内容	目標値	結果
a	地域による授業の実施回数（地域でのフィールドワークなどを含む）	8 回	20 回
b	運営指導員会やカリキュラム開発、コンソーシアム構築・運営のための会議回数	9 回	9 回

<添付資料> 目標設定シート

1 2 次年度以降の課題及び改善点

(1) 本事業に関する管理機関の課題や改善点について

①事業終了後の自走について

課題と改善点については前述9③のとおり。

②教職員及びコーディネーターの負担増

地域との協働が進みフィールドワーク等を含めた学びが拡大するほど、教職員と地域との渉外や打ち合わせ等の回数が増す。また、探究学習の学びを実証する場としての各行事やイベント（例えば矢上高校の場合では10(2)の一覧表に見られるような実践）はどうしても放課後や土日での実施になることが多く、教職員やコーディネーターの引率も増える。これらによって、教職員やコーディネーターの負担が増している。本事業において、矢上高校の場合は、協育パートナーが教職員やコーディネーターの代わりを担うことが可能との仮説に基づいて研究が進んでおり、今後、さらに検証が必要となる。

(2) 研究開発にかかる課題や改善点について

①校内体制の整備、校内への波及

前述の通り「11 研究開発の成果」を確認すると、目標値と比べて成果・結果の数値が上がっており、今年度実施した「総合的な探究の時間」や学校設定教科「起業探究」が地域人育成に貢献したといえる。しかし、昨年度と異なる点は、地域人材のロールモデルである「協育パートナー」が密に生徒と関わったことであるため、「総合的な探究の時間」や学校設定教科「起業探究」の内容や教授法ではなく、「協育パートナー」の生徒への伴走力が高かったことが、人材育成につながったのではないかと考える。

今後は地域の教育力の高さを「総合的な探究の時間」や学校設定教科「起業探究」にさらに生かすだけでなく、他教科・他学科にも応用できるように協育パートナー制度の見直し、教員誰もが地域と協働した探究的な学びづくりができるように校内体制の再構築などを図る。

②個別最適化な学びへの転換

今年度、運営指導員会やカリキュラム開発専門家から、「個別最適化な学びになっているか」という指摘を受けている。生徒が主体的に地域と関わり、魅力や課題に触れ、自ら「この地域を良くしたい」と思って行動できるよう、カリキュラム等の見直しを図る必要がある。

①の通り、今年度のカリキュラムで地域人材育成に一定の貢献は上げることができた最大の要因は、「協育パートナー」の存在である。今年度以上に「協育パートナー」との連携を強めるとともに、個別最適化した探究的な学びに進化させるために、ICT 活用・チームづくり、課題設定などを工夫する必要がある。

【担当者】

担当課	島根県教育委員会教育指導課	TEL	0 8 5 2-2 2-6 0 8 5
氏名	馬庭寿美代	FAX	0 8 5 2-2 2-6 0 2 6
職名	企画幹	e-mail	shidou@pref.shimane.lg.jp